

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ホッケ

学名 *Pleurogrammus azonus*

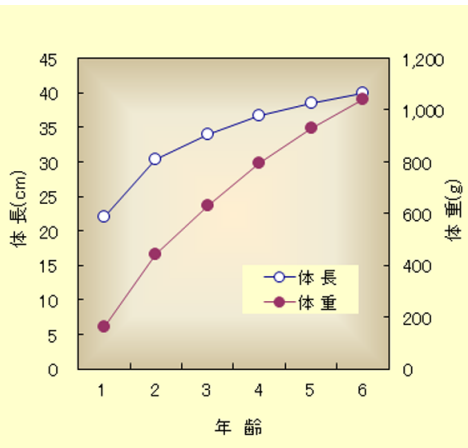
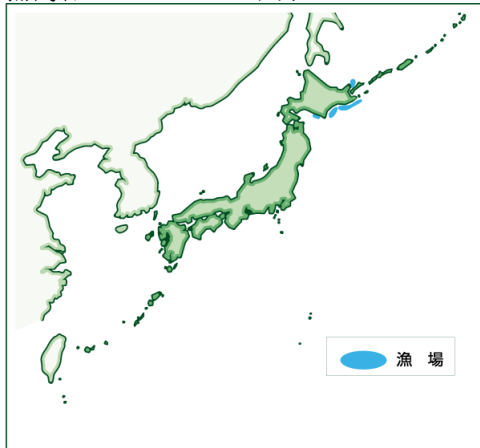
系群名 根室海峡・道東・日高・胆振

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 10歳以上
成熟開始年齢: 1歳の終わり(一部)、2歳の終わり(大部分)
産卵期・産卵場: 日高沖や根室海峡、知床半島先端水域では10月中旬～11月中旬
索餌期・索餌場: 正確な索餌場は不明、漁場域は、襟裳以西、道東、根室海峡、北方四島周辺水域の水深200m以浅に形成
食性: 仔魚期には主にカイアシ類、未成魚期にはヨコエビ類を多く捕食、岩礁周辺で定着生活に移行後は魚類、魚卵、イカ類、エビ類、ヨコエビ類、オキアミ類などを捕食
捕食者: 不明

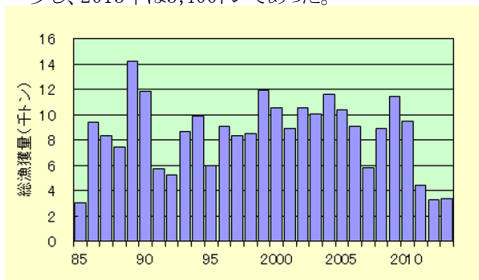


漁業の特徴

刺網、定置網、沖合底びき網漁業(沖底)などで漁獲され、総漁獲量の7～9割は沿岸漁業による。襟裳以西(日高・胆振)および道東では沖底および刺網、北方四島では沖底、根室海峡では刺網および定置網による漁獲が主体である。北方四島操業枠組み協定に基づき、国後島沿岸における刺網による漁獲も行われている。海域別漁獲量は根室海峡で最も多く、海域全体の5～8割を占めている。

漁獲の動向

漁獲量は、1989年の14,200トンから1992年の5,300トンに大きく減少した後、2000年代半ばまでは変動しながら漸増傾向を示したが、全体としては1980年半ば以降、同程度の水準のなかで変動していた。2009年以降は再び大きく減少し、2013年は3,400トンであった。

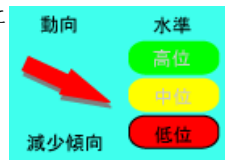


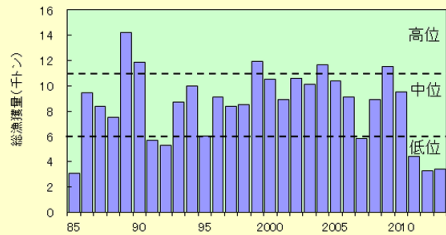
資源評価法

根室海峡および道東の漁場は北方四島周辺水域および千島列島水域と接しており、ホッケの分布に関する情報を入力できないことや、ホッケの漁獲は広範囲にわたって様々な漁法で行われており、漁獲量以外の資源量の指標(CPUEなど)を得ることが難しいことから、近年の総漁獲量の変化から資源状態を判断した。なお漁獲の大半を占める根室海峡における定置網類および刺し網の一日一隻あたり漁獲量(CPUE)も判断の参考とした。

資源状態

資源水準は、過去29年間(1985～2013年)の漁獲量の平均値を50とした場合の相対値について、35未満を低位、35以上65未満を中位、65以上を高位と設定した。2013年の漁獲量は3,400トンで20となり、低位と判断した。過去5年間(2009～2013年)の漁獲量は、漁獲量が多かった2009年以降2012年まで3年連続して減少し、2013年もほぼ同じ値となった。根室海峡における定置網および刺し網のCPUEも漁獲量と同様の傾向を示しており、資源動向は減少と判断した。





管理方策

漁獲量の推移から、当該海域の資源量は比較的安定して推移していたと考えられるが、2009年以降漁獲量は全ての海域で急激に減少している。2011年以降の漁獲量の減少は著しく、2010年から2012年級群の加入量が大きく減少している場合を想定し、漁獲圧を下げる必要がある。ABC算定規則2-2)に従い、ABCを算定した。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	2.4千トン	$0.7 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.93$	—	—
ABCTarget	1.9千トン	$0.8 \cdot 0.7 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 0.93$	—	—

- ABC算定規則2-2)によって、ABCは $\text{ABClimit} = \delta_2 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot \gamma_2$ 、 $\text{ABCTarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$ で計算した
- γ_2 は、 $\gamma_2 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の0.5)、bとlは漁獲量の傾きと平均値(直近3年間)である
- Cave3-yrは2011-2013年の平均漁獲量

資源評価のまとめ

- 過去29年間の漁獲量の推移から資源水準を、また過去5年間の漁獲量の変化から資源動向を判断し、低位、減少とした
- 根室海峡における定置・刺網類のCPUEを動向判断の参考とした

管理方策のまとめ

- 資源量は比較的安定して推移していたと考えられるが、2009年以降全ての海域で漁獲量が急激に減少している
- 1歳魚の加入状況や、来遊状況によって漁獲量の変動すると考えられる
- 現行よりも漁獲圧を下げる必要がある

執筆者: 森田晶子・濱津友紀・船本鉄一郎

資源評価は毎年更新されます。